



神々の言葉  
童話篇



星 良謙

キリギリスを笑う者よ  
何のために働くのか  
己の欲望を満たすことがそれほど大切なのか  
己の保身がそれほど大切なことか

キリギリスを笑う者よ  
空の青さを覚えているのか  
海の青さを覚えているのか  
夜空の星のきらめきを覚えているのか  
野に咲く花の美しさを覚えているのか

心のゆとりを失い  
人生のゆとりを失い  
ただ賞賛を受けることだけが人生の輝きと考える者よ  
自らの才能を誇ることを生きがいとする者よ  
そなたは何のために生きるのか

目に見えるもの、手に触れられるものにしか  
価値を見いだせぬ者よ  
空の青さも海の青さも知らずに生きるのか  
夜空の星の輝きも野に咲く花の美しさも知らずに生きるのか  
何と哀れな者たちよ

本当の人生の豊かさを知らぬ者たちよ  
他の者から評価されることでしか  
己の価値を知ることができぬ者たちよ  
汝らは哀れなり  
アリの人生ほどにも価値なき人生を生きるか  
汝らにキリギリスを笑う資格はない  
アリは冬が来る前に命を落とすことに  
汝らは気が付いているのか  
アリは自らのために冬に備えているのではない  
後に続く者たちのために働き  
まだ見ぬ者たちのために働く  
己の子供のためではなく  
自らの名前を残すためでもなく

名も知らぬ者たちのために働いていることを  
知らねばならない

アリを笑う者よ

楽しむことだけが人生と考える者よ

注目されることだけが人生の輝きであると考え者よ

ギリギリの人生ほどにも価値なき人生を生きるのか

汝らは気が付いているのか

ギリギリは己のために歌うのではなことに

冬が来る前に自らの命が終わることを知るからこそ

ギリギリは命のある限り歌う

一人でも多くの者を楽しませるために

一人でも多くの者の心を豊かにするために

そしてアリもギリギリも自らの人生の価値を知り

共に後悔のない人生を生きる者たちであることを知るならば

彼らを笑うことなどできないはずである

冬が訪れたことを嘆く者よ  
汝にキリギリスを嘲笑う資格はなく  
我が世の春を謳歌して  
永遠に春が続くと信じた者よ  
汝にキリギリスを嘲る資格はない

我が身の不運を嘆く前に  
永遠の春が続くと考えていたと嘆く前に  
過去の栄光の日々を捨てよ  
華やかかりし栄光の日々を忘れよ

秋風吹くならば  
汝が如何にその美声を歌うとも  
その声に戻り返る者としてなく  
木枯らしが吹くならば  
その声は掻き消されるであろう

冬が訪れたことを嘆く者よ  
汝にキリギリスを嘲笑う資格はなく  
自らはアリの如く働き続けたと考える者よ  
汝は何のために働き続けたのか  
誰のために働き続けたのか

権力を失い  
地位を失うならば  
すべてが失われた如く考えるのであるならば  
自らの声の美しさに酔いしれていたキリギリスと同じである

我が身の不運を嘆く前に  
永遠の春が続くと考えていたと嘆く前に  
過去の栄光の日々を捨てよ  
華やかかりし栄光の日々を忘れよ

秋風吹くならば  
汝が如何に権勢を振るうとも  
その権威にひれ伏す者としてなく

木枯らしが吹くならば  
汝の記憶は忘れ去られるであろう

亀の如く身を守るのはやめなさい  
自らの不幸をなげくのはやめなさい  
不幸の原因を他の者に求めるのはやめなさい  
現実から逃げるのはやめなさい  
何も問題は解決しないのです

自らの弱さを知りなさい  
自らの愚かさ知りなさい  
自らの責任を自覚しなさい  
言い訳をするのはやめなさい  
都合の悪い現実を目をそむけるのはやめなさい

相手があきらめるのを待つのはやめなさい  
根負けするのを待つのはやめなさい  
それで問題が解決したと考えるのはやめなさい  
問題が解決したのではなく  
あなたがそれだけ信用を失ったのです  
あなたがそれだけ好機を逃したのです

亀の如く心を閉ざすなら  
あなたは誰からも相手にされなくなるのです  
強き者に勝てないと思うならば  
用心深く生きることで身を守りなさい

亀の如く手足を縮めることで  
身を守れると考えることは愚かです  
知恵ある者には動かぬ獲物でしかなく  
力ある者には甲羅は無力なのです

強き者に怯えて心を閉ざしても  
身を守ることはできません  
強き者に怯えて立ちすくむならば  
生き残れないことを知りなさい

自らが弱き者であるならば  
用心深く生きなさい

うさぎの如く慎重に生きるのは  
弱き者の知恵なのです

自らが弱き者であるならば  
素早く逃げることで身を守りなさい  
うさぎの如く素早く逃げるができなければ  
強き者の餌食となるのです

何ゆえにうさぎと足の速さを競うのか  
自らの歩みの速さを知るのであるならば  
足の速さと競うべきではなく  
自らの歩みが遅くとも  
それを恥じる必要もない

何ゆえに亀と足の速さを争うのか  
亀の歩みの遅さを知るならば  
相手に勝ったとしても何の意味なく  
それを自慢するならば  
多くの者から嘲笑されるであろう

弱き者を打ち倒しても  
それを誇るなかれ  
弱き者を打ち倒すことを  
誇る前に  
弱き者を侮ることを恐れよ

強き者に果敢に挑戦することは  
価値あることではあるとしても  
無謀な挑戦は避けよ  
自らが弱者であることを知るならば  
自らが強者となれる道を選べ

亀が泳ぎにてうさぎと競うなら  
うさぎに負けることはなく  
亀がその身体の硬さにて  
うさぎと競うなら  
亀がうさぎに負けることもない

されば自らの生きる道を探すことも勝利の秘訣となる



亀よ

何ゆえにうさぎとその足の速さを競うのか

亀よ

うさぎに足の遅さを揶揄されたとして

競争を挑む必要があったのか

亀よ

汝は自らの歩みの遅さと引き換えに

硬き甲羅を得ることで身を守る

されば歩みの遅さを恥じる必要もなく

うさぎに競争を挑む必要もない

されば亀よ

汝が自らの歩みの遅さを嘆くなら

競うべき相手は走り抜けるうさぎではなく

昨日の自らの歩みの速さであり

過去の自らの歩みの速さである

されど亀よ

汝が歩みの速さを求めるのであるならば

硬き甲羅は邪魔となるであろう

亀よ

汝はその重たき甲羅と引き換えに

自らを守る手段を得たのであり

うさぎは

重たき甲羅を捨てることで

自らを守る足の速さを得たことを忘れてはならない。

## 金の斧と銀の斧

---

目先の欲に目が眩み  
すべての斧を失う者を笑うのはたやすい  
されど女神が鉄の斧だけを返したならば  
汝は女神に感謝することができるであろうか  
金の斧と銀の斧を見せられながら  
自らの使い古した鉄の斧だけを返されたならば  
汝は女神に感謝することができるであろうか  
期待したほどの成果が得られなかったならば  
自らが失った鉄の斧を再び手にした喜びを忘れ  
手にした成果の少なさを嘆くのではないか

だが金の斧と銀の斧を与えられなかったことを嘆くことなく  
自らが失った鉄の斧が戻ったことを喜び  
女神に感謝するならば  
その手にした鉄の斧の切れ味は鋭くなり  
金の斧と銀の斧を得た以上の富みを得ることになる  
それが神の恩寵であることを知らねばならない

## 金の卵を産むガチョウ

---

金の卵を産むガチョウを殺す者をあざ笑うなかれ  
世の多くの者は自らが金のガチョウを手にしなが  
その価値に気付くこともなく  
卵を産むこともできぬほど痩せ衰えさせ  
自らの不運を嘆く

自らが手にしたるは金の卵を産むガチョウなのに  
その価値がわからずに  
自らの手にて追い払い  
我が望むは金の卵であり  
ガチョウではないと不満を語る  
何と哀れな者たちよ  
ヘルメスはその姿に涙を流す

金の卵を産むガチョウは  
努力と言う名の餌を求めるかもしれない  
知識と言う名の餌を求めるかもしれない  
決断と言う名の小屋にて飼わなければならないかもしれない  
だが怠惰と言う名の餌と惰性と言う名の餌を与え  
臆病と言う名の小屋にて飼うならば  
痩せ衰えるであろう  
何と愚かな者たちよ  
ヘルメスはその愚かさに涙を流す

わずかばかりの金の卵を手にした者は  
その卵を産んだのはガチョウであることを忘れ  
自らの与えた餌を誇り  
その小屋を誇る  
さればガチョウは傲慢と言う名の卵を産み  
やがて痩せ衰えるであろう  
そしてヘルメスは悲しげに  
汝の前から立ち去る



## 田舎の鼠と街の鼠

---

鼠は貧しさと引き換えに穏やかな暮らしを選び  
街の鼠は豊かさと引き換えに穏やかなる暮らしを捨てたと考えるなかれ  
街の鼠は危険の中に生き  
田舎の鼠が平穏に生きると考えるのは  
あまりにも愚かな考えである

田舎にて暮らすならば田舎にて生きる術を身につけなければなら  
街にて暮らすならば街にて生きる術を身につけなければならぬ  
どちらを選ぶとしても生きる術を身につけなければならぬ

街に暮らす鼠は田舎に暮らす術を知らず  
田舎に暮らす鼠は街に暮らす術を知らず  
街に暮らす鼠が田舎に暮らすならば笑い者になるかもしれず  
田舎に暮らす鼠が街に暮らすならば笑い者になるかもしれない  
されば街に暮らす鼠が田舎の鼠を笑う資格はなく  
田舎に暮らす街の鼠を笑う資格もない

街に暮らす鼠は落ち着なく暮らし  
田舎に暮らす鼠は心静かに暮らすと考えるのはやめよ  
街には街の危険が潜み  
田舎には田舎の危険が潜む

たとえ田舎にて暮らすとも  
畑を荒らすならば人間に追われ  
野山に暮らすとも  
天敵がいることを忘れてはならない  
狐に怯え、鷹に怯えなければならぬことを忘れてはならない

## 腹を膨らませる蛙

---

牛の大きさを知る者であるならば  
蛙が如何に腹を膨らませたとしても  
牛ほどには大きくなれぬことを知る  
されど牛の大きさを知らぬ蛙は  
自らの大きさにて考える

その姿を遠くより見るならば  
何をしているかすらわからぬであろう  
如何に蛙が自らの姿を大きくしたとしても  
牛には小さき者でしかない

蛙を笑うことは容易い  
されど自らの背丈を離れて考えることができる者は少ない  
自らの力を凌駕する者があるならば  
その力に怯え  
自らの力を誇示するために  
その者を罵倒することに腐心する者は多い  
されば蛙を笑うことはできず

自らが弱き者であるならば  
強き者の姿を知れ  
弱き者が如何に自らを大きく見せるとも  
意味なきことを知れ  
蛙が如何に自らを膨らませるとしても  
牛の大きさを知ることはできず  
知恵なき者が如何に虚勢を張るとも  
賢者の知恵を知ることはできず

されば自らの大きさを知るならば  
虚勢を張るのはやめよ  
知恵なき者が虚勢を張るならば  
賢者はその愚かさを嫌い  
知恵を授けず



ライオンとイルカ

陸の王と海の王が友となり味方となるのは最適であると  
ライオンがイルカと同盟を結ぶ  
されどライオンが危機に陥り  
イルカに助けを求めれども  
陸に上がることができないでいることを罵る  
されどイルカは陸に上がることができないのは  
自然が原因であると語る

イソップは語る

友情を結ぶにあたっては危機の際に  
側にいてくれることのできる者を選ぶべきである

されど危機の際に側にいてくれることを願って  
同盟を結ぶのであるならば  
それは友情ではなく打算であり  
打算であるならば  
それが裏切られたとしても  
嘆いてはならない

打算から生まれた同盟であるならば  
自分に利益がなければ相手は動かず  
動くことで相手に利益があるからこそ  
同盟が成立することを忘れてはならない



陸の王と海の王が友となり味方となるのは最適であると  
ライオンがイルカと同盟を結ぶ  
されどライオンが危機に陥り  
イルカに助けを求めれども  
陸に上がることができないでいることを罵る  
されどイルカは陸に上がることができないのは  
自然が原因であると語る

イソップは語る  
友情を結ぶにあたっては危機の際に  
側にいてくれることのできる者を選ぶべきである

されど危機の際に側にいてくれる者を選んだとしても  
危機の際に助力してくれるとは限らず

それぞれの者がそれぞれに事情を抱えていることを  
忘れるほどに愚かであってはならない。

如何に友情厚き者であるとしても  
守るべきものはあり  
如何に正義感強き者であるとしても  
動けぬ事情はあり

されば友情だけで人が動くと考えるほど愚かであってはならない

## 鼠の恩返し

---

ライオンに捕らえられた鼠が命乞いをして  
助けてくれたならば恩返しをすると語り  
ライオンは笑って逃す  
程なくライオンは獵師に捕らえられ  
ロープで木に縛られる  
鼠はその声を聞き  
ロープをかじってライオンを助け  
鼠は語る  
あのときあなたは私を笑って馬鹿にしたが  
鼠にも恩返しができるのです

イソップは語る  
時勢が変われば力ある者も弱き者の助けが必要となる

多くの者は力のある者が弱き者を助けることの大切さを  
教訓として学ぶであろう  
されど鼠は恩返しを約束したことを忘れてはならない  
自らが困窮したときに懇願する者は多い  
されど恩返しを約束する者は少なく  
その約束を守る者はさらに少ない

弱き者を助けるならば見返りを期待するなかれ  
懇願する者が如何に約束したとしても  
その約束は忘れ去られ  
弱き者が力を得るならば  
恥ずかしき過去の記憶となる

自らが弱き者であるならば  
懇願するのはやめよ  
如何に困窮するとしても  
自らの尊厳を捨てることなかれ  
強き者は懇願する者を蔑み  
尊厳を持つ者を尊ぶ

自らが弱き者であるとしても  
強き者には尊厳を持ちて語れ

弱くとも如何なる力を持つかを語れ  
如何なる仕事ができるかを語れ  
強き者であるならば  
その語る内容にて判断する

懇願することしかできぬ者に  
同情するのはやめよ  
哀れを乞う者に情けをかけるのはやめよ  
蜜を求める蟻には限りがなく  
同情を求める者には限りがない

自らが苦難の中にあるならば  
力を蓄える努力をせよ  
困難に耐えられないならば  
自らの生き残れる道を探せ  
懇願することで解決を求めることが  
どれほど傲慢なことであるかを知れ

## 塩を運ぶロバ

---

塩を運ぶロバが足を滑らせ  
その荷が軽くなったことを喜び  
次に海綿をその背に運ぶとき  
荷が軽くことを期待して  
わざと足を滑らせ命を落とす

多くの者はその愚かさを笑う  
されど塩を運ぶだけのロバであるならば  
命を落とすこともなく  
海綿を運ぶだけのロバであるならば  
わざと足を滑らせることもない

もし塩を運ぶロバ川で足を滑らせることで荷が軽くなると  
海綿を運ぶロバに教えるならば  
そのロバは川で足を滑らせるかもしれない  
されば他の者が背負う苦悩の中身を知ることなければ  
他の者の人生に干渉するのはやめよ

汝の背負いし荷は塩であったかもしれない  
他の者の背負いし荷は海綿であったかもしれない  
汝の経験したことだけが真実ではないことを知るならば  
自らの経験だけで語るのはやめよ

## 肉を運ぶ犬

---

川面に映る自らの姿に吠える犬を笑うなら  
自らの無知を恥じよ  
川面に映る肉をくわえた犬が自らの姿であることを知るならば  
犬は肉を失うことはなかったはずである

川面に映る自らの姿に吠え犬を笑うなら  
思慮浅き自らを恥じよ  
川面に映る肉をくわえた犬が自らの姿であることに気付くならば  
犬は吠えることもなかったはずである

川面に映る自らの姿に吠える犬を笑うのはやさしい  
されど犬の失敗に学ぶ者は少ない  
肉を運ぶ犬の失敗を  
欲深きことだけに求めるならば  
汝は同じ失敗をするであろう

自らの失敗を恥じる者は多けれど  
その失敗に学ぶ者は少なく  
他の者の失敗を笑う者は多けれど  
その失敗に学ぶ者はさらに少ない

狐は鶴に豆のスープを平らな皿に入れて笑い者にすれど  
鶴は首の細長い壺に食べ物を入れてだされ  
今度は狐が食べられず  
イソップは哲学者と一緒に酒を飲むことの難しさを語る  
哲学者が難解な話をすれば多くの者には理解できず  
それらの者が下世話な話をすれば哲学者は楽しめず  
一緒に酒を飲む目的は忘れ去られる

多くの者は自らを哲学者の立場と考え  
自らの考えが理解されないことなげく  
自らの得た教訓を金科玉条と考え  
雄弁に語る者は多い  
そして自らの語る話が多くの者に理解されなければ  
自らの話が理解されぬことをなげく  
されど理解されないのではなく  
相手にされていないことは多い

哲学者が細かい理詰めの問題に深入りするならば  
多くの者は関心を失うのは  
多く者に理解できないからであり  
雄弁に語る者が多くの者の関心を得られぬならば  
多くの者には価値のない話であるからである

## 狐と葡萄

---

葡萄を採れずに負け惜しみを語る狐を笑う者よ  
狐を笑うのをやめよ  
たとえ狐が完熟した葡萄を熟していないと語るとしても  
それをあざ笑うのはやめよ

多くの者は世の中の失敗せし者をあざ笑う  
失敗せし者をあざ笑うことで自らを慰める  
何と愚かな者たちよ  
そなたは狐の失敗を笑う資格はない  
狐は葡萄を採るために努力したことを忘れてはならない  
その努力が実らぬとしても  
何ゆえにその努力を笑うのか

世の多くの者は自らの力にて  
葡萄を採るための努力をすることなく  
その実を得ることを願う  
親鳥が運ぶ餌を持つ雛鳥の如く  
自らの不幸を嘆くことにしからぬ者に  
狐を笑う資格はないことを知らねばならない

## 腹を膨らませる蛙

---

外の世界を知ることなく  
自らの世界に安住することを求める者は多い

されば  
どれだけの者が  
牛の大きさと我が身の大きさを比べようとした  
蛙を笑うことができるのか

自らの権威を守ることに腐心し  
自らの権力を守ることに汲々とするならば  
蛙を笑う資格もない

されば  
その姿は牛の大きさを知らずともなく  
我が身を大きく見せようとした蛙よりも哀れなり

僅かな権威にしがみつき  
僅かな権力を守るために  
自らの責任を問われることを恐れ  
自らが失敗することに怯える者に  
蛙を嘲笑する資格はない



蝙蝠があるときは自らを獣と語り  
またあるときは自らを鳥と語るとも  
蝙蝠は蝙蝠として生きる  
それを裏切りと考えるのはやめよ

何ゆえに獣でなくてはならぬのか  
蝙蝠は蝙蝠として生きるだけであり  
自らを獣と語れども  
それにどれほどの意味があるのか

生き残るために自らを獣と語れども  
獣を真似して生きることなく  
生き残るために自らを鳥と語れども  
鳥を真似して生きることなく  
蝙蝠は自らの道を歩む

蝙蝠が自らを獣と語り  
獣の如く生きるならば獣は嘲笑し  
蝙蝠が自らを鳥と語り  
鳥の如く生きるならば鳥は嘲笑する  
されば蝙蝠は自らが獣であるか鳥であるかに関心を持つことなく  
蝙蝠として生きることを選ぶ

蝙蝠があるときは鳥と語ってその場を言い逃れ  
またあるときは獣であると言って言い逃れるとしても  
それを卑怯であると誰が咎められようか

蝙蝠が鳥であるか  
蝙蝠が獣であるかを誰が決めるのであろうか

蝙蝠は蝙蝠として生きるだけであり  
蝙蝠は鳥であることを拒み  
蝙蝠は獣として生きること拒む

されば蝙蝠を鳥か獣かと決めるのは  
人間の都合でしかなく  
鳥であることを拒み  
獣として生きること拒む者に  
鳥か獣かを問うことは無意味であり  
それを使い分けることを咎めるのも  
また無意味なことではない

## 羊の皮を着た狼

---

狼が羊飼いを欺くために  
羊の皮を被り  
羊飼いを欺いて  
羊の群れにまじって草を食んだ

しかし夜になると  
狼も羊小屋と一緒に押し込められ  
入り口には柵がはめられた

羊飼い夕食のために包丁で  
狼を殺した

イソップは語る  
借り物の衣装でふるまう者は  
命を失うことが良くあるし  
それが大惨事の遠因むにもなるのだ

されど借り物の衣装でふるまう者が  
利益を得るならば妬み

借り物の衣装でふるまう者が  
大惨事にあうならば拍手喝采する者に  
借り物の衣装でふるまう者を  
あざける資格はなく

借り物の権威にひれ伏す者に  
借り物の衣装でふるまう者を  
笑う資格もない

見よ、多くの者たちが  
借り物の衣装に身を包み  
借り物の権威にて身を飾り  
借り物の威光に酔いしれる

されど借り物の権威に酔いしれる者たちは  
そのことに気付くこともなく

その威光を失ったときに  
自らの力を知ることはできない

## 猫の鈴

---

どの鼠もが猫に怯え  
どの鼠もが自らの身の安全を優先する  
されば如何なる名案であるとも  
机上の空論でしかなく  
如何なる妙案も絵に描いた餅となる

大言壮語する者は勇ましく  
多くの者を魅了すれども  
その危うさを知る者は沈黙を守る

愚かなる者たちは猫に鈴を付けることの危うさを知らず  
大言壮語する者の言葉に踊らされ  
甘き言葉に惑わされる

されどその危うさを誰しもが知るならば  
誰もその言葉に踊らず  
机上の空論となる

されば汝に利を説く者は  
汝に鈴を手渡す者であるかもしれず  
されば汝に義を説く者は  
汝に猫に向かわせようとする者かもしれない

汝がその危うさを知らず  
大言壮語する者の言葉に踊らされるならば  
汝に鼠たちを笑う資格はない

## 三匹の子豚

---

煉瓦を積む子豚よりも木の家を建てる子豚が怠惰であり  
木の家を建てる子豚よりも藁の家を建てる子豚が怠惰であると  
何ゆえに決め付けることができるのであろうか

住む家もなくさまよえる者であるならば  
一晩の雨露をしのげるだけの藁の家でも貴重であろう  
それを怠惰であると嘲笑することができるのであろうか  
それを怠慢であるとあざ笑うことができるのであろうか

煉瓦を積み上げて家を建てるだけの財力もない者であるならば  
安普請と嘲笑されるとも木の家を建てるであろう  
されば何ゆえに怠惰な者と決め付けることができるのであろうか  
されば何ゆえに愚かな者と決め付けることができるのであろうか

自らが藁の家に住むとも自らを卑下する必要もなく  
自らが煉瓦の家に住むともそれを誇るべきではない  
愚かなる者とは藁の家に住むと嘲笑する者であり  
怠惰なる者とは煉瓦の家に住むことこそが誇りであると考える者である  
されば自らに必要な家を求めればよく  
自らの住む家で自らを飾るべきではない

神々の言葉 童話篇

<http://p.booklog.jp/book/24096>

著者：星 良謙

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/raifuku/profile>

発行所：ブックログのパブー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社：株式会社paperboy&co.

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/24096>

ブックログのパブー本棚へ入れる

<http://booklog.jp/puboo/book/24096>

神々の言葉 童話篇

<http://p.booklog.jp/book/24096>

著者：星 良謙

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/raifuku/profile>

発行所：ブックログのパブー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社：株式会社paperboy&co.

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/24096>

ブックログのパブー本棚へ入れる

<http://booklog.jp/puboo/book/24096>